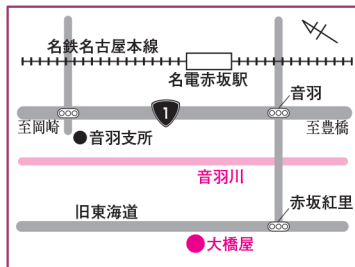




# みーつけた!



## 旅籠大橋屋のそでうだつ



赤坂宿（現在の赤坂町）は、かつて東海道五十三次の36番目の宿場町としてにぎわい、江戸時代終わりごろの記録によれば、約60軒の旅籠<sup>はたご</sup>や本陣、問屋場などがありました。その当時の面影を今に伝えるのが、江戸時代から続く旅籠大橋屋です。大橋屋の2階屋根の軒端には、「そでうだつ」と呼ばれる三角形に張り出した壁があります。

うだつとは、宿場町など建物が密接して建てられている場合に、隣家からの火事が燃え移るのを防ぐ防火壁として造られたものです。江戸時代中期以降になると、装飾を目的に造られるようになり、人々は自分の財力を誇示するために、屋根の上に競って立派なうだつを設けるようになりました。やがて、費用の節約などから2階屋根より上の部分を造らずに、軒下だけに壁を造るようになったのが「そでうだつ」です。

事業に成功したり出世したり、しなければ「うだつ」を上げられないということが転じて、「出世できない」「成功できない」という場合に「うだつがあがらない」と言うようになったそうです。

